

進化する乳がん治療に挑む —オーダーメイドの乳房再建療法も—

大阪医科大学
乳腺・内分泌外科学寄附講座特別任命教授

岩本 充彦先生



近年、食生活や生活習慣の変化などのため、乳がんにかかる女性が年々増えている。30歳～64歳の女性では、がん死亡率の第1位になっているが、治療法が劇的に進化している。

乳がんにかかる人は多くても、生存率は高くなっている。大阪医科大学乳腺・内分泌外科学の岩本充彦・特別任命教授に進化する乳がん治療についてお聞きしました。

(聞き手・池田知隆)

乳がん検診をめぐって

——最近の傾向は。

ス病院の移植外科に留学しましたが、まだ27、28歳の若い研修医のころです。今まで考えると、異例中の異例ですが、海外に出たいという夢がかないました。その病院は、欧州で初めて肝移植を実施したところで、たくさんの刺激



オペの様子

——乳がん治療の現状は。

ス病院の移植外科に留学しましたが、まだ27、28歳の若い研修医のころです。今まで考えると、異例中の異例ですが、海外に出たいという夢がかないました。その病院は、欧州で初めて肝移植を実施したところで、たくさんの刺激

を受けました。電気メスを初めてにぎつたのもその病院でした。

——乳腺・内分泌分野を選ばれたのは。

は、たくさんのお武器（治療法）があります。

乳腺の摘出、再建手術のほか、女性ホルモン

を抑えるホルモン療法、がん細胞を増殖させるたんぱく質を狙い撃ちする分子標的療法、抗がん剤でがん細胞を殺す化学療法などを使い分けたり、組み合わせたりして治療効果を上げています。外科的手術だけでなく、極めて内科的な全身療法が有効で、毎年のように新薬が開発されています。患者さんの病態に応じて総合的に治療の取り組むことができ、やりがいを感じています。

——乳がん治療の現状は。

乳房を切除する場合、筋肉まで切除する拡大手術をすることは現在、ほぼ皆無です。乳房を失う喪失感、悲しみを少しでも和らげられるよう、当院では形成外科と連携、協力し乳房

を温存する手術を行っています。乳房を温存する手術には、乳頭乳輪を温存する手術のことです。腫瘍の広かりを正確に診断し、がんの取り残しがないよう、また外形を維持できるように両者のバランスを保つことを心がけて行います。現在、当病院で年間約300例の患者さんに手術をしていますが、約60%の方は乳房温存手術を受けています。病院によっては、当病院では「90%を残します」と乳房の温存率の高さを強調していたところもあります。しかし、再発率や、患部の取り残しが問題になり、それについては反省の時期にきています。きちんと患部を摘出したうえで乳房の形を整えようと、いうのが世界的な流れで、私も同感です。できれば、がんを取り除いた上で、さらに手術前より美しい乳房にしようという思いで、取り組んでいます。

——医療が進化し、患者の側にも正しい知識が求められていますね。

再建術にも積極的に取り組んでいます。皮膚温存皮下乳房切除術、乳頭乳輪温存乳房切除術の場合、同時に乳房再建術を行うことが可能です。その際、広背筋（背中の筋肉）や腹直筋（お腹の筋肉）、深下腹壁動脈穿通枝皮弁（お腹の脂肪）を用いて乳房の膨らみを形成しています。さらにインプラント（乳房再建用の人工物）を用いた手術も導入しています。

患者さんの希望に応じて、可能な限りオーダーメイドの再建手術を行っています。

——医師として特に心がけていることは。

当院のがん相談支援センターのセンター長

は大きく異なります。
ライフスタイルの変化とともに増加し、この30年間で罹患率は約5倍になりました。罹患率1位といつても死率5位です。かつて根治が無理とされていた症例でも治療薬の開発が進み、生存期間が確実に伸びています。他臓器のがんに比べて、若年で発症することが大きな特徴で、早期診断・早期治療が大切です。

——どんな症状があるのですか。

乳頭からの血性分泌液も特徴的です。乳房の皮膚痛みは伴わないことが多いです。乳房の皮膚の変化、乳房周囲のリンパ節の腫れなどで気づくこともあります。進行して遠隔転移している場合、骨の痛みや咳・食欲不振など、他臓器の症状から気づくケースもあります。

乳がんをめぐる家族歴や月経、出産、授乳、経口避妊薬の使用など女性ホルモンのさまざま影響もありますが、発症の原因がわからないうこともたくさんあります。

——乳がん検診の現状は。

受診率は全国平均47.4%（2019年調査）で、50%を超えている都道府県は半数以下です。大阪は41.7%（同）とワースト5位です。一方、乳がん死亡率が減少している欧米での受診率は、約70～80%に達しており、わが国でも受診率を上げていくことが求められています。40歳以降の女性は、自覚症状が無くても2年に1回は、乳がん検診を受けることをお

——大阪医科大学では。

まあ、「よく学び、よく遊べ」でしたね。がんについて学びたいと消化器系を選択しました。当時は、消化器系に乳腺外科も含まれていましたので、消化器疾患と乳腺疾患の両方を勉強していました。

——早い時期に海外留学されていますね。

清風高校（大阪市）のころは、文系人間で英語、国語が得意で、数学、物理は苦手でした。先生から文系への進路を進められたこともありました。でも、医師になる夢が消えることはありませんでしたね。

——そもそもどうして医師になろうと。父は会社を経営しており、親戚中を見渡しても医師はいませんでした。ただ、祖父母が若くしてがんで亡くなつたことや、小学2年のころ、野口英世の伝記を読んで書いた読書感想文コンクールで表彰されたこともあって、医師になりたいと思うようになりました。小学校の卒業文集にも将来の夢として「外科医師」とはつきり書いています。

——どんな高校時代を。

父は会社を経営しており、親戚中を見渡しても医師はいませんでした。ただ、祖父母が若くしてがんで亡くなつたことや、小学2年のころ、野口英世の伝記を読んで書いた読書感想文コンクールで表彰されたこともあって、医師になりたいと思うようになりました。小学校の卒業文集にも将来の夢として「外科医師」とはつきり書いています。

も兼務していますが、がん患者さんの悩みは
実際に様々です。社会的な立場、経済的な状態、
家族内や職場での事情など、可能な限り寄り
添いながら治療にあたっています。

若い医学従事者へのメッセージを。

私は、もう一度、生まれ変わつても乳腺外科
医になりたいと思っています。若い医師たち
には努力は裏切らない、と言いたいですね。
眞面目に取り組んでいれば、必ずその努力は
報われます。そして、乳腺外科医を目指して戴
きたいです。乳がん診療は忙しいけど、やりが
いの方が遙かに勝っていますから。

岩本充彦特任教授の略歴

1966年4月	大阪市生まれ
1984年3月	清風高校卒業
1992年3月	大阪医科大学卒業
1994年4月	ケンブリッジ大学附属アデンブルックス病院移植外科留学
2002年4月	大阪医科大学一般・消化器外科学教室助教
2012年4月	同大学病院乳腺・内分泌外科医長 一般・消化器外科講師
2013年4月	同大学病院乳腺・内分泌外科科長
2016年4月	同大学一般・消化器外科学教室診療准教授(兼務)
2017年4月	同大学乳腺・内分泌外科学寄附講座特任教授
(2021年)	大阪医科大学より大阪医科大学に施設名が変更)

日本外科学会専門医、日本乳癌学会専門医指導医・評議員、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本消化器外科学会認定医、近畿外科学会評議員



■大阪医科薬科大学／大阪府高槻市大学町2-7 2021年に大阪医科大学と大阪薬科大学と統合し大阪医科薬科大学となる。学部は医学部、薬学部、看護学部。同大学病院は903床(一般病床:863 精神病床:40)